

《善知鳥》小考

——地獄描写の表現をめぐって——

家 原 彰 子

はじめに

能《善知鳥》は、《鶉飼》や《阿漕》とともに三卑賤の一つに数えられる曲であり、中でも陰惨な曲と評されている。殺生を扱うか否かに関わらず広く能を見渡すと、地獄を描く曲が様々作られている。地獄を描く能の中で《善知鳥》はどのような特徴をもつのだろうか。

《善知鳥》曲中で主に地獄が描かれるカケリ後の詞章を以下に掲げておく。

10 「ノリ地」地親は空にて、血の涙を、親は空にて、血の涙を、降らせば濡れじと、菅蓑や、笠を傾け、ここかしこの、便りを求めて、隠れ笠、隠れ蓑にも、あらざれば、なほ降り掛かる、血の涙に、目も紅に、染み渡るは、もみちの橋の、

鶉か。

11 「中ノリ地」地娑婆にては、うとうやすかたと見えしも、うとうやすかたと見えしも、冥途にしては化鳥となり、罪人を追つ立て鉄の、嘴を鳴らし羽を叩き、銅の爪を研ぎたてては、眼を掴んで肉むらを、叫ばんとすれども猛火の煙に、むせんで声を上げ得ぬは、鴛鴦を殺しし咎やらん、逃げんとすれど立ち得ぬは、羽抜け鳥の報ひか。シテうとうはかへつて鷹となり、地われは雉とぞなりたりける、逃れ交野の狩り場の吹雪に、空も恐ろし地を走る、犬鷹に責められて、あら心うとうやすかた、安き隙なき身の苦しみを、助けて賜べやおん僧、助けて賜べやおん僧と、いふかと思へば失せにけり。

《善知鳥》とは、陸奥外の浜の獵師が、生前うとう獵を行った罪で地獄に墮ち、化鳥に苛まれる様子を描く能である。うとう獵では、

親鳥の「うとう」という声に子が「やすかた」と応える習性を利用し、うとうの子を捕らえる。親鳥は子を奪われる悲しみから血の涙を降らせ、獵師は蓑笠を着て血の雨から逃れようとする様子が『新撰歌枕名寄』にもみられ、『善知鳥』とも共通することについては『謡曲拾葉抄』をはじめとして指摘がある。作者付の類では世阿弥作とされるが、後述するように戦後には世阿弥作説はほぼ否定されている。

本稿では、作者の周辺を確認した上で、地獄を描く能において『善知鳥』がもつ特徴について、後場とくに終曲部の詞章の表現を中心に検討する。そこに、陰惨さや卑賤、殺生をせざるを得ない生活の厳しさといった曲全体のテーマや印象を導く表現があると考えられるからである。具体的には「声を上げ得ぬ」「目も紅に、染み渡る」「羽抜け鳥」「交野」という表現に注目し、その一部が平安時代中期頃までの歌語とは異なっていることを指摘する。これらを通して、『善知鳥』が地獄を描く他の能とはどのように異なるのかを考えてみたい。

一. 作者の周辺

《善知鳥》上演は能勢朝次氏の調査により、寛正六年二月二十八日、将軍院参の際の観世演能（『親元日記』^②）を初演として多く確認

されている。^③ 演能記録として残るのは観世の記事が早いですが、『善知鳥』は必ずしも観世の曲だとは言い切れず、金春の曲である可能性も考慮しておきたい。

先にも触れたが、『善知鳥』の作者については、世阿弥ではないとする説が現在一般的である。例えば、小西甚一氏は文体や語法などから世阿弥ではなく、また同系の作能技法を守る元雅・禅竹でもないとする説^④、小田幸子氏は一条兼良と交渉のある人物、金春宗筠が関与するかとする説^⑤、三宅晶子氏は構造やテーマなどの作法から禅竹時代の能とする説を提示している。^⑥

稿者も小田氏や三宅氏のように、世阿弥以降の金春系の人物の作ではないかと考えるが、一方で『善知鳥』が世阿弥作品の影響を受けて作られた可能性を指摘したい。『善知鳥』11段「肉むらを、叫ばんとすれども猛火の煙に、むせんで声を上げ得ぬは、鴛鴦を殺し咎やらん」とあるが、ここには地獄で責めを受けるシテが声を上げられない苦しみが描かれている。『往生要集』や安住院本「地獄草紙」では、地獄では罪人の叫び声が響き渡る様子が多く描かれている。^⑦ その中で例外的に、『往生要集』大叫喚地獄、受鋒苦には「熱鉄の利き針にて口舌俱に刺され、啼き哭ぶことあたはず。」とあり、叫び声さえ上げられないために、一層深い苦しみが描かれる場合がある。

一般的には地獄では罪人の叫び声を描かれるのに対して、能においては「叫んでも声が出ない地獄の苦しみ」を描く例が多くみられる。世阿弥関連の作品に、「叫べど声が出でばこそ」という表現が用いられる例がある。《鵜飼》には、ふしづけの苦しみの描写に「助くる人も波の底に、霖にし給へば、叫べど声が出でばこそ」とあり、《砧》にはシテが地獄で苦しむ描写に「胸の煙の、炎にむせべば、叫べど声が出でばこそ」とある。これらの表現には、次のような講式からの影響がみられる。『二十五三昧式』には「泣而涙不_レ落_チ。猛火焼_レ眼_ヲ故_ニ。叫_レ而声不_レ出_テ。鉄丸満_{ツル}満_{ツル}喉_ヲ故_ニ。」とあり、「六道講式」には「泣_{ケド}不_レ落_チ。猛火満_ミ満_ミ眼_ヲ之_ニ故_ニ。叫_レ而声不_レ出_テ。鉄丸入_レ喉_ノ之_ニ故_ニ。」とある。これらの記述と《善知鳥》の表現を比較すると、叫ぼうとしても声が出ない状況は類似している。但し《善知鳥》において声を上げられない原因が「猛火の煙」であることに注目すると、「胸の煙の、炎にむせべば」とある《砧》の表現が最も近い。つまり、《善知鳥》の表現は、講式を踏まえたというよりも、先行する能《砧》を踏まえたと考えるのが自然ではないだろうか。さらに、《善知鳥》の特徴としては、声を上げられない意を掛けた「鴛鴦」という語を用いており、修辭的な工夫を加えた表現となっている。

このように、《善知鳥》の作者は講式に影響を受けた《砧》の表

現を踏まえることができる状況にあった人物であり、演能記録なども含めて考えると、世阿弥以降の金春系の人物ではないだろうか。

二、地獄の責めと獵師の罪の意識

《善知鳥》における地獄の責めと、獵師の罪の意識はどのように描かれるのだろうか。『往生要集』や『地獄草紙』において地獄の責めは生前の行いに対応する形で次のように示される。

大火炎ありて昼夜に焚焼す。熱炎の嘴の鳥・狗犬・野干ありて、その声、極悪にして甚だ怖畏すべし。常に来て食ひ噉み、骨肉狼藉たり。金剛の嘴の虫、骨の中に往来して、その髓を食ふ。昔、貝を吹き、鼓を打ち、畏るべき声を作して鳥獸を殺害せる者、この中に墮つ。〔『往生要集』等活地獄、不喜処〕

またこの地獄に別所あり。鷄地獄と名づく。昔、人間にありし時、心悪かなるによりて、腹悪しくして、諍いを好み、あるいは、生ける物を侘びしめ、鳥獸を悩ます者、これに生まる。この地獄に猛き炎身に満ちたる鷄ありて、罪人を頻りに蹴り踏む。罪人の身分つたづたになりて、その苦患耐え忍ぶべき方なし。⑪

（原家本『地獄草紙』鷄地獄）

『往生要集』等活地獄・不喜処では、生前鳥獸を畏ろしい声をもって殺害した者は、地獄では熱鉄の嘴の鳥などから極悪な声によつ

て脅かされ食い噉まれる様子が描かれる。同様に、原冢本『地獄草紙』鶏地獄でも、生前、生ける物や鳥獸を困らせたものは、地獄で燃えさかる炎に満ちた鶏に、頻りに蹴り踏まれる様子が描かれる。

生前の罪が生き物に関することであれば、地獄で生き物に責められるのである。ちなみに、『往生要集』等活地獄・瓮熟処では、生前殺生をして煮て食べた者が、地獄で同様に煎り熟される様子が描かれる。つまり、地獄における責めとは、生前の罪の裏返しであり、生前に関わった動物や具体的な行いが反映されることがまあることがわかる。このように考えると、『善知鳥』の獵師が地獄で叫び声を上げられないのも、生前声を用いてうとうを騙して獵を行った報いだと考えられる。

次に、獵師が責めを受ける地獄の化鳥について検討したい。これは『善知鳥』11段「シテうとうはかへつて鷹となり、地われは雉とぞなりたりける」の解釈に関するものである。

従来多くの諸注釈では、地獄での責めは、「化鳥の鷹となった善知鳥」によって責められると解釈されている。¹² 飯塚恵理人氏はこの解釈に則り、地獄での責めを受ける場面は、「被害者」である善知鳥からの復讐のようなものであり、「仏教における「地獄」とは異質である¹³」と述べている。

しかし一方で、伊藤正義氏のように、あくまでも「善知鳥の報い

で、冥途の化鳥に責められる¹⁴」のであって、うとうと化鳥を同一視せず、地獄の鷹（化鳥）はうとうでないとする説もある。先に確認したように、地獄における責めとは、因果応報が行われる中で、生前に関わった動物や具体的な行いが反映されることがある。《善知鳥》においては、生前、うとうという「鳥」を殺生したために、地獄では化鳥の鷹という「鳥」に責められるという、鳥においての対応関係はみられるが、果たしてそれは「復讐」なのだろうか。

加えて、能のなかでは、シテが生前苦しみを与えた対象や、そのとき周囲を取り巻いていたものとは異なるものによって、地獄においてシテが責められる様子が類型的に描かれる。¹⁵ 《善知鳥》における「うとう」と「鷹」も同様に考えると、うとうが鷹に変化して復讐を行っていると考えなくてよいと思われる。

ただし、『善知鳥』は単に仏教的な因果応報の様子を見せるだけではない。獵師の罪の意識が描かれるところに注目したい。世阿弥活動期以前の例として『五音』に記される《地獄の曲舞》がある。ここでは「ざんすい地獄¹⁶」「劔樹地獄」「石割地獄」「火盆地獄」といった地獄名が列挙され、地獄の有様を演じて見せることが目的であり、自らの犯した罪についての感慨などは描かれない。また《求塚》では「こはそも妾がなせる科かや。恨めしや。」とあるように、シテ自身が地獄で責めを受ける理由を理解できてはいない。

それらに対して、『善知鳥』では獵師が自らの罪を自覚していることは、すでに指摘されている。例えば小田幸子氏は、うとうやうかた親子の情愛の深さと獵師親子の情愛を重ねる部分を作者の創案として評価し、うとうやうかたの本説までの展開で、獵師の罪の意識が深刻化されていると指摘する¹⁷⁾。また三宅晶子氏は、獵師が鳥の親子を苦しめるような殺生をしたことに対する「精神的苦悩」を読み取り、カケリ以降に残酷な殺生への後悔から来る心の苦しみが表現されているとする¹⁸⁾。

それでは、『善知鳥』において獵師の罪に対する意識はどのように描かれているのだろうか。6段「サシ」では「此の身は重き罪咎の、心はいつかやすかたの、鳥獸とらげものを殺しし」とあり、殺生という重い罪科を認識し、7段「掛ケ合」では「あはれげにいにしへは、さしも契りし妻や子も、今はうとうの音に泣きて、やすかたの鳥の安からずや、なにしに殺しけん、わが子のいとほしいごとくにこそ、鳥獸とらげものも思ふらめ」とあり、深い情愛をもつ鳥獸の親子を殺生したことへの後悔を述べる。8段「サシ」では「ただ明けても暮れても殺生を営み」、「クセ」では「身の苦しさも悲しさも、忘れ草」「報ひをも忘れける、事業をなしし悔しさよ」とあり、死後の苦しき・悲しさを忘れ殺生したことへの後悔が描かれる。また同じく8段「クセ」では「そもそもうとう、やすかたのとりに、品変はり

たる殺生の。シテ中に無慚やなこの鳥の、地おろかなるかな筑波峰の、木々の梢にも羽を敷き、波の浮き巢をも掛けよかし、平沙に子を生みて落雁の、はかなや親は隠すと、すれどうとうと呼ばれて、子はやすかたと答へけり、さてぞ取られやすかた」とあり、うとうの残酷さを実感する。

ここで注目したいのが、その後の10段「親は空にて、血の涙を、……なほ降り掛かる血の涙に、目も紅に、染み渡るは」という部分である。ここでは、うとう親鳥の血の涙が獵師の目を赤く染める様子が描かれている。善知鳥説話において、実際に獵師の身体に親鳥の血の涙が降りかかる場面は確認できない。例えば、「新撰歌枕名寄」では「哥二、子をおもふなみたの雨の蓑のうへにかゝるもかなしやすかたの鳥、と読り¹⁹⁾」とあり、親鳥の血の涙が降りかかるのは、かろうじて獵師の「蓑のうへ」である。対して『善知鳥』では、獵師の身体のうち、特に「目」を染めたという点を重視すると、「獵師目らも悲しみの涙を流している」とは解釈できないだろうか。加えて、「目もくれ」という表現は、『清経』「これは中将殿の黒髪かや、見れば目も昏れ心消え、なほも思ひの増さるぞや」などにもみられるように、悲嘆を強調する表現として用いられる。そして、『善知鳥』ではそもそも獵師の後悔を描く流れの中にある。これらを踏まえて、親鳥の流す血の涙で獵師の目が紅に染まる描写は、獵

師の罪の意識を考察する上でも重要な表現だといえる。

このように、《善知鳥》は単なる地獄の有様を描くだけでなく、
 獵師の罪の意識を描く点が他の能とは大きく異なる。また、獵師が
 「血の涙」で目を染めるところに、うとうと親鳥の悲しみの実感を伴
 った深い後悔が描かれていると考えられる。親子の情愛を引き裂い
 たことに獵師自ら改めて気がつき涙を流すところにも、善知鳥説話
 から離れた《善知鳥》の独自性が見出されるのではないか。

三、地獄描写における歌語の利用

《善知鳥》の地獄描写にはシテの比喩や情景を描く際に歌語が用
 いられる。そもそも、古い曲において地獄自体の描写は、先の《地
 獄の曲舞》のように仏教経典の言葉を用いた説明的なものである。

例えば《求塚》でも同様に「地而じて起き上がれば、獄卒は笞を当
 てて、追つ立つれば漂ひ出でて、八大地獄の数々、苦しみをかへし
 おん前にて、懺悔の有様を見せ申さん、まづ等割黒繩衆合叫喚、大
 叫喚、炎熱酷熱無間の底に、足上頭下と落つる間は、三年三月の苦
 しみ果てて」と描かれる。また《舟橋》では7段「シテいかに行者
 われはなほし、この妄執のゆゑにより、浮かみかねたる橋柱の、重
 き苦患を見せ申さん。シテ泣く涙、雨と降らん渡り川、水増りな
 ば。シテ帰り来るかに、地帰れや帰れ徒波の、シテ柱を戴く盤石の苦

患、地これこれ見給へあさましや。」、8段「シテ執心の鬼となつて、
 地執心の鬼となつて、地三途の川橋の、橋柱に立てられて、悪竜の
 気色に変はり、程なく生死娑婆の妄執、邪淫の悪鬼となつて、われ
 と身を責め苦患に沈む」とあり、世阿弥以前の作品における地獄描
 写には、明らかに和歌を意識した語は見出せない。つまり、《善知
 鳥》の地獄描写に歌語が用いられるのは、世阿弥の頃には見られな
 い新しい特徴だといえる。

それでは、《善知鳥》の地獄描写ではどのように歌語が用いられ
 ているのだろうか。連歌や和歌の言葉と能の言葉が近いことは周
 知のことだが、その背景として島津忠夫氏は能作者と連歌師の和歌
 についての知識が共通の基盤に立つことを、²⁰⁾ 佐藤恒雄氏は連歌師が
 類題和歌集を利用していたことを指摘している。²¹⁾ その例として、
 《善知鳥》の「羽抜け鳥」という語に注目したい。

「羽抜け鳥」は、和歌や連歌に僅かながらも用いられている語で
 ある。例えば、『新撰六帖題和歌』第六帖、為家詠「夏草の野ざは
 がくれのはぬけ鳥ありしにもあらずなるわが身かな」にみられる。
 この歌は『夫木和歌抄』や『六華和歌集』にも収められ、「羽抜け
 鳥」は類題和歌集に引き継がれた歌語だといえる。²²⁾ また連歌では
 『専順五百句』に「おひてこゝろのかはりもやせん／人なる、庭の
 みきハのはぬけとり／うへかぬるいけのふか田におりたちて／なつ

くさかくれあさるしらさき²³」や、後の『藻塩草』にも「はぬけ鳥」
「はぬけになれる水鳥」といった語がみられるようになる。つまり、
「羽抜け鳥」は、王朝的歌語とは異なる、中世以降の和歌や連歌に
しか見いだせない歌語だと考えられる。²⁵

このように、『善知鳥』では地獄描写における歌語の使用という、
世阿弥の頃までには見られなかった特徴が認められ、「羽抜け鳥」
という語は、鴛鴦・鷹・雉といった前後の鳥尽くしの鳥の中でも、
王朝的歌語とは異なる趣をもつ新しい歌語だといえる。

四 「交野」の中世におけるイメージと曲中での意味

「羽抜け鳥」の他に、王朝的歌語とは異なる印象をもつ語に「交
野」が挙げられる。『善知鳥』において「交野」は、11段「逃れ交
野の狩り場の吹雪」という表現に用いられている。舞台とは一見関
わりのない「交野」がなぜ用いられるのか。「交野」という語のも
つ中世におけるイメージと、それが『善知鳥』曲中でもつ意味につ
いて検討してみたい。

戦後の注釈書では、表章氏が「交野と吹雪をつないだのは、新古
今、春下、藤原俊成「またや見む交野のみ野の桜狩り花の雪散る春
の曙」に基づく。」²⁶と指摘して以降、春の交野とする注釈が引き継
がれている。²⁷確かに、謡曲の例を見渡すと、『住吉詣』『籠祇王』

『雲雀山』では「交野」は春の美景として描かれている。²⁸しかし一
方で、『謡曲拾葉抄』は類歌として、『新続古今和歌集』冬歌、崇光
院詠「御狩せしかり庭の跡も今は世にあはれかた野の雪のふる道」
を挙げている。また、大和田建樹氏は、吹雪が鷹狩りの季節と重な
ることを指摘している。²⁹

『善知鳥』における「かたの」の「吹雪」に、敢えて雪と桜のイ
メージを重ねた俊成詠「またや見む」を踏まえると積極的に解釈す
る必然性はあるのだろうか。「交野」がどのようなイメージをもつ
語なのか、具体的に和歌などの例から検討を加えたい。

まず、勅撰和歌集に注目すると、二十一代集中「交野」を詠む歌
は三十五首あり、うち冬歌は十四首、春歌は四首である。春歌にく
らべ、圧倒的に冬歌が多い。以下その例の一部を掲げる。

a あられふるかた野ののかりころもぬれぬやどかす人しなけれ
ば
〔金葉和歌集(三奏本)〕第四、冬、藤原長能

百首歌めしける時 崇徳院御歌

b みかりするかたののみにふる霰あなままだき鳥もこそ立て

〔新古今和歌集〕巻第六、冬歌

延文百首歌たてまつりける時 前参議実名

c みかりする片野の雪の夕暮にあまの河かぜさむく吹くらし

〔新後拾遺和歌集〕巻第六、冬歌

建保名所百首歌たてまつりける時 前参議忠定

dはし鷹のはらふうは毛に玉ちりてかたのの原に霰ふるなり

〔新統古今和歌集〕卷第六、冬歌

aは「俊頼髓脳³⁰」をはじめ歌論にも採られ、広く知られていた。また、b c dにあるように、「交野」という語は「雪」や「霰」とともに詠まれ、冬歌にもよく用いられる歌語であった。これは勿論、勅撰和歌集に限ることではない。

交野、鷹犬者両三騎、経廻雨霜霏下

eみかりするかたのへぞゆくはしたかのはねうちほらひゆきはふり
つつ 〔道濟集〕

鷹狩

f雪も散れ霰もかかれ御かり人かたのはらはよそに聞くべし

〔俊成祇園百首〕

隆房

gふぶきするかたのの原をかり行けばくろふの鷹の雪にまがはぬ

〔正治初度百首 上・冬〕

e fのように狩り場「交野」における雪・霰を描く和歌があり、中でもg『正治初度百首』の冬歌のように吹雪する交野は描かれ、鷹狩りと吹雪は強い連想関係にあるといえる。

これらを踏まえると、『善知鳥』の曲中に描かれる地獄と、吹雪

する交野が響き合ってくる。つまり、『善知鳥』6段「サシ」に「たとひ紅蓮大紅蓮なりとも。名号智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも法水には勝たじ」との表現があるが、この「紅蓮大紅蓮」と「焦熱大焦熱」とを対応させる表現は、すでに《地獄の曲舞》にも「ある時は、焦熱大焦熱の、ほのほにむせび ある時は、紅蓮大紅蓮の、水に閉ぢられ、鉄杖頭を砕き、火爆足裏を焼く。」とあるように定型表現である。さらに考えると、『善知鳥』終曲部にある「交野の狩り場の吹雪」は、同じ終曲部のその前にある、「猛火の煙に、むせんで声を上げ得ぬは」の「猛火の煙」に対して、「紅蓮大紅蓮」の極寒の地獄を表現したものだといえないだろうか。このように、『善知鳥』終曲部では「猛火の煙」に対するものとして「交野」の吹雪が描かれており、それは、「焦熱大焦熱」に対する「紅蓮大紅蓮」の比喩として考えられる。地獄の比喩と考えると、やはり終曲部での交野の吹雪は極寒を強調するものであり、桜のイメージを重ねる余地はないと思われる。二条良基の連歌論『連歌十様』には次のような、狩り場と雪と罪とを結びつけた句がみられる。

六、連歌ハコアテ云物アルベシ。イカニモコアテノナキ物ノ句ハ、能付事アルベカラス候也。罪ノムクヒハサモアラバアレト云句ニ、救済ガ 月残ル狩場ノ雪ノ朝ボラケ ト付タリシハ、

是等ハ大様ニ聞エタレドモ、サモアラバアレト云トコ口肝要也。
テニハノ事コト更心ニカケテ案ゼラルベキニヤ。³²⁾

「交野」という地名ではないものの、殺生の罪に対する報いと雪
降る狩り場とが、先行する連歌にも描かれていたという点では、
《善知鳥》との関連は決して浅くないと思われる。

さらに、説話のなかに「交野」を舞台にした、殺生を戒めるもの
がみられる。《善知鳥》との関わりを指摘されている、狂言《禁野》
である。大蔵流の狂言《禁野》のなかで交野が禁野になった由来が
語られるのだが、その由来は、推古天皇の狩りを聖徳太子が咎めた
という聖徳太子伝承の部分と、刃の尾をもつ三足の雉をくろがねの
鷹が退治したという化鳥退治の部分から成る。大蔵虎清本の当該部
分は次のようである。

あと「これはかわちの国かたのこうり。きんやのきじりやうに
すまひするもので御さある。……して「此野のめい所成しさい
は。すいくてんわう。此かたのへみゆきあつて。あけくれ御た
かをつかはれしに。しよてうめいわく仕り。ちのなみだをなが
し。つのくにてんわうじさしてにげて行を。太子御らんじて。
わうるに御いけん被成。みやこへくわんぎよあつて。その御あ
とをきんやとなづけ。よ人たかをつかう事ならず。そのころに
てや候らん。三ぞくのきじ出来する。けてうなれば。たいじあ

るべきと被成候へ共。やまとのうだのこうりをかけてすみ。こ
れにてとらんとすれば。ひとはにうだのこうりへ行。うだのこ
うりにてとらんとすれば。此野へ参る。³⁴⁾

ここでは、三足の雉を退治しに、菟田野から移動し「此野（交野）」
へ来たとなっている。ちなみに、大蔵虎明本では菟田野は触れられ
ず、話の舞台は最初から交野となっている。³⁵⁾

狂言《禁野》の聖徳太子伝承部分について、橋本朝生氏が太子伝
の一つ『正法輪蔵』（文保元年（二三二七））との関連を指摘してい
る。「是太子三十九御歳」には次のようにある。

年号ハ定居二年 歳次庚午 歳夏五月五日推古天皇大和国菟田
野成行幸給時多群兵共供奉召具 御狩有觀覽一処也……
諸畜類モラサシハツサシト四方八方 責懸 飛ニ虚空ニ鳥鷹被
追走ニ大地ニ獸被責ニ犬ニ大地虚空雖ニ免ニ死ニ鳥類獸更ニ無
……

抑今日行幸運參仕侍 但天子 山野御行殺生大罪親令犯ニ給
御事向後努々々々 不可ニ有御政也。³⁷⁾

ここには、狩りの様子と、聖徳太子が「殺生ノ大罪」を戒めたこと
が記される。《善知鳥》11段「逃れ交野の狩り場の吹雪に」の直後
に、「空も恐ろし地を走る、犬鷹に責められて」という表現がある
が、ここに『正法輪蔵』との類似点が指摘できるのではないか。

《善知鳥》	○（交野）	—	○
『正法輪藏』	○（菟田野）	○	○
狂言《禁野》	○（交野）	○	—

狩り場
聖徳太子が推古天皇の殺生を戒めた話
空では鷹に、地では犬に責められる場

おわりに

狂言《禁野》だけでなく『正法輪藏』をあわせて、《善知鳥》の詞章との共通点を考察したい。有名な狩り場での狩りとその殺生を戒める話型が『正法輪藏』と狂言《禁野》にみられる。《善知鳥》にもその話型のイメージを重ね得る。つまり、殺生に対する戒め、殺生への後悔をイメージさせる言葉として「交野」という狩り場の名が用いられたのではないか。

このように、《善知鳥》において「交野」は吹雪が吹き荒れる場であり、それは地獄の紅蓮大紅蓮の比喩だと考えられる。《善知鳥》作者は「紅蓮大紅蓮」という表現を使うこともできたはずだが、終曲部ではあえて歌語などを用いた表現でこれらの地獄を想起させたと解したい。また、中世において「交野」は、聖徳太子が殺生を戒めた場として理解されていた可能性があり、《善知鳥》でも殺生を戒める土地の名をあえて用いたのであろう。

《善知鳥》における複数の表現を取り上げ、その効果について考えてきた。本稿で取り上げたのは終曲部の表現ではあるが、これらは曲全体のテーマや印象と深く関わっている。「声を上げ得ぬ」「目も紅に染み渡る」「羽抜け鳥」「交野」を通し、シテの持つ卑賤な印象や親子を引き裂く殺生への深い後悔を浮き彫りするような様々な表現の工夫を指摘した。さらに、『地獄の曲舞』のような仏教経典に基づく説明的表現を越えた、当時用いられた歌語（「羽抜け鳥」や「交野」）が認められた。これらを併せもつのが《善知鳥》という能ではないだろうか。つまり、歌語の使用、殺生を後悔する人の心の表現が、地獄の恐ろしさを単純に説明する地獄の表現の定型から一歩踏み込んだ描き方となっている。これは小田氏や三宅氏が指摘するように、殺生を行った後悔に苦しむシテの内面を照射しており、さらに修辭的な工夫とともに、世阿弥以後の地獄を描く能の一つの在り方を示しているのである。

注

※《善知鳥》の本文引用・小段構成は表章・横道万里雄校注『日本古典文学大系 謡曲集下』（岩波書店、一九六三年）に拠る。（但し金春八郎本

転写卷子本、淵田虎頼等節付本、金春禪風八郎本転写三番綴本により、文意に大きく関わる異同がないことを確認した。その他の能の本文引用は以下の通りである。《求塚》《舟橋》《鴉飼》《砧》《経政》《清経》は、表章 横道萬里雄校注『日本古典文学大系 謡曲集』（岩波書店、一九六〇—六三年）に拠る。《阿漕》は、伊藤正義校注『新潮日本古典集成 謡曲集』（新潮社、一九八三年）に拠る。《住吉詣》《龍祇王》《雲雀山》《雪鬼》は、芳賀矢一・佐佐木信綱『謡曲叢書』（博文館、一九一四—一九五年）に拠る。また、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。

① 全国大学国語国文学会研究史大成編纂委員会編『国語国文学研究史大成 第八』（三省堂、一九六二年）所収「能本作者註文」『いろは作者註文』『歌謡作者考』『自家伝抄』参照。

② 竹内理三編『増補続史料大成 第十卷』臨川書店、一九六七年。

③ 能勢朝次「演能曲目考」『能楽源流考』岩波書店、一九三八年、一一六〇—一一三〇頁。ただし、寛正五年四月に観世によって行われた糺河原勸進猿楽では『善知鳥』は演じられていない（『群書類従 第拾九輯』（『群書類従完成会、一九三三年）所収『糺河原勸進猿楽記』『異本糺河原勸進猿楽記』参照）。一方、永正二年四月に行われた金春禪風主催の粟田口勸進猿楽では初日に『善知鳥』が演じられている（『前掲』『群書類従 第拾九輯』所収『粟田口猿楽記』参照）。この日は禪風作『嵐山』の初演とも考えられており（『香西精』『作者と本説——嵐山』『観世』第二十七卷第一号、一九六〇年一月。『能謡新考』椋書店、一九七二年所収）、金春にとって重要な催しが行われる同日の演目に『善知鳥』が並ぶことの意味は少なくないと考えられる。

④ 小西甚一「善知鳥（謡曲狂言鑑賞・三）」『言語と文芸』第二二号、一九六二年三月。

⑤ 小田幸子「作品研究「善知鳥」」『観世』第四十卷第十一号、一九七三年

年十一月。『連珠合璧集』や『鴉鷺合戦物語』にうとうと関する記事が見られることから、作者と一条兼良との交渉を、また『金春大蔵派作者付』に「空八行舟 宗印 名ノ書様一休」とあることから、『善知鳥』の創作に宗筠の関与を推定する。

⑥ 三宅晶子「研究十二月往来六九 禅竹時代の能〔善知鳥〕」『鍊仙』第三三九号、一九八六年五月。『歌舞能の確立と展開』ベリカン社、二〇〇一年所収。

⑦ 『往生要集』衆合地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄（石田瑞麿校注『日本思想大系 源信』岩波書店、一九七〇年）や、安住院本『地獄草紙』髪火流、火末虫、雲火霧、雨炎火石の各地獄の末尾（小松茂美編『日本絵巻大成 餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』中央公論社、一九七七年）などにみられる。

⑧ 能の例の中に地獄での叫びはほとんどみられない。『求塚』では「八大地獄の数々、苦しみをかへしおん前にて、懺悔の有様を見せ申さん、まづ等割黒繩衆合叫喚、大叫喚、炎熱酷熱無間の底に、足上頭下と落つる間は」とあり地獄名を列挙する中にみられ、『阿漕』では「叫ぶ息は焦熱大焦熱の 焰煙雲霧 たちみに隙もなき 冥途の責めも度重なる」のような比喩として描かれている。

⑨ 高野辰之編『日本歌謡集成 卷四中古近古編』東京堂出版、一九八九年改訂三版。『二十五三昧式』『六道講式』の当該部分は、岩崎雅彦氏御教示。

⑩ 和讀雑集『厭欣和讀』には「全身猛火に焼爛し、火焰にむせび声いえず」との記述もある（注⑨書所収）。

⑪ 注⑦『日本絵巻大成』所収。

⑫ 佐成謙太郎『謡曲大観 第二卷』（明治書院、一九三〇年）、小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集 謡曲集②』（小学館、

一九九八年）、西野春雄校注『新日本古典文学大系 謡曲百番』（岩波書店、一九九八年）、天野文雄他校注『罷を読む④信光と世阿弥以後』（角川学芸出版、二〇一三年）。

⑬ 飯塚恵理人「夢幻能に描かれた来世——修羅道と地獄を中心に——」（『日本文学』第五十六巻第七号、二〇〇七年七月）。

⑭ 伊藤正義校注『新潮日本古典集成 謡曲集上』新潮社、一九八三年。

⑮ 生前と地獄の因果応報に、能では「AはかへつてBとなる」という類似表現がしばしば用いられている。《阿漕》では「もちあみの 波はかへつて 猛火となるぞや あら熱つや 堪へがたや」、「心引く網の 手馴れし鱗類今はかへつて 悪魚毒蛇となつて 紅蓮大紅蓮の氷に 身を傷め骨を碎けば 叫ぶ息は 焦熱大焦熱の 焔煙雲霧 たちるに隙もなき 冥途の責めも度重なる」や、《経政》では「紅波はかへつて猛火となれば、身を焼く苦患恥づかしや」と描かれる。《阿漕》や《経政》では、Aは、「鱗類」や「紅波」のように、生前シテが苦しみを与えた対象や、そのとき周囲を取り巻いていたものを表し、Bは、「悪魚毒蛇」や「猛火」のように、生前のAとは異なるBに地獄で責められることを表している。つまり、生前のAとは異なるBに地獄で責められることを表すと考えられる。

⑯ 表章・加藤周一校注『日本思想大系 世阿弥 禅竹』岩波書店、一九七四年。

⑰ 注⑤に同じ。

⑱ 注⑥に同じ。三宅氏は世阿弥の碎動能（《求塚》《舟橋》《鶴飼》）と比較し、《善知鳥》は精神的苦悩を問題にしている点で異なると指摘する。

⑲ 黒田彰子編『新撰歌枕名寄』古典文庫、一九八九年。

⑳ 島津忠夫「連歌と謡曲」『観世』第四〇巻六号、一九七三年六月。

㉑ 佐藤恒雄「新撰六帖題和歌の成立」『藤原為家研究』笠間書院、二〇〇

〇八年所収。

㉒ 「羽抜け鳥」の類似表現をもつ和歌としては、「今は又はぬけになれる水とりのたちるかなはぬ身をいかにせん」（『新撰六帖題和歌』第三帖、題詠「みづどり」、知家）がある。

㉓ 金子金治郎・太田武夫編『七賢時代連歌句集』角川書店、一九七五年。赤木文庫蔵本『專順五百句』（夏の部）。引用の「」は、改行を示す。

㉔ 大阪俳文学研究会編『藻塩草 本文篇』和泉書院、一九七九年。巻十鳥類「やすかた」の項には、善知鳥説話に関する記述がみられる。

㉕ 《善知鳥》曲中にある中世以降の歌語として、他に「津の国の。輪田の笠松や箕面の。滝つ波も我が袖に。たつや」の、「輪田の笠松」や「箕面の滝」が指摘できる。

㉖ 表章校注『日本古典文学大系 謡曲集下』岩波書店、一九六七年、《善知鳥》補註。

㉗ 日本古典文学大系、日本古典文学全集、新潮日本古典集成、新編日本古典文学全集、新日本古典文学大系。新編日本古典文学全集では「桜吹雪」を訳出している。

㉘ 《住吉語》「これや交野に狩り暮れて、春見し花のそれならん」（《籠祇王》「交野の御野の桜狩」、《雲雀山》「様の真弓春くれば。……雪には明くる交野の御野」）

㉙ 大和田建樹編『謡曲評釈 第五巻』博文堂、一九〇七年。

㉚ 『俊頼髓脳』には長能詠「あられふる交野のみののかりごろもぬれぬやどかす人しなれば」と道済詠「ぬれぬれもなほかりゆかむはし鷹のうはげの雪をうちはらひつ」の二首について藤原公任は、雨や蔽のために鷹狩りを止めることがないことや、道済詠は鷹狩りの本来あるべき様子を描くと評している（橋本不美男他校注・訳『新編日本古典文学全集 歌論集』小学館、二〇〇二年）。

- ③① 雪の交野を舞台とした能に《雪鬼》がある（西野春雄「作品研究」『雪鬼』（国立能楽堂調査養成課編『国立能楽堂上演資料集（4）雪鬼』日本芸術文化振興会、一九九三年）。その中で在原業平がかつて詠んだとされる和歌「いかにせん交野の御野の狩衣濡れぬ宿かす人しなれば」がある。この歌の背景には先のa歌が類歌として指摘されている（芳賀矢一・佐佐木信綱『謡曲叢書 第三卷』博文館、一九一五年、頭注）。
- ③② 岡見正雄校『良基連歌論集三』古典文庫、一九五五年。『連歌十様』の当該部分は、重田みち氏御教示。
- ③③ 永井猛「狂言「禁野」の形成と展開」（『説話』第五号、一九七四年六月）は、《善知鳥》から狂言《禁野》への影響について触れる。
- ③④ 古川久編『狂言古本二種』わんや書店、一九八〇年。
- ③⑤ 大塚光信編『大蔵虎明能狂言集翻刻註解 上巻』清文堂出版、二〇〇六年。
- ③⑥ 橋本朝生「狂言と説話」（本田義憲・池上洵一・小峯和明・森正人・阿部泰郎編『説話の講座 説話とその周縁——物語・芸能——』勉誠社、一九九三年）。
- ③⑦ 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成 田楽・猿楽』三一書房、一九七四年。
- 〔付記〕 本稿は、能楽学会第十三回大会（二〇一四年六月二十二日）における口頭発表に基づくものである。多くの御助言を賜りました皆様には、深謝申し上げます。また《善知鳥》謡本に関する資料閲覧に際して法政大学能楽研究所にご高配を賜りました。記して謝意を表します。